

以下の【問題文】を読み、下記の【設問】に答えなさい。

【問題文】

オーストラリアが発見されるまで、旧世界の人たちは白鳥と言えはすべて白いものだと信じて疑わなかった。経験的にも証拠は完璧にそろっているように思えたから、みんな覆しようのないくらい確信していた。はじめて黒い白鳥が発見されたとき、一部の鳥類学者（それに鳥の色がものすごく気になる人たち）は驚き、とても興味を持ったことだろう。

でも、この話で大事なのはそういうところではない。この話は、人間が経験や観察から学べることはとても限られていること、それに、人間の知識はとてももろいことを描き出している。何千年にもわたって何百万羽も白い白鳥を観察して確認してきた当たり前の話が、たった一つの観察結果で完全に覆われてしまった。そんなことを起こすのに必要なのは、黒い（それに、聞いたところだとかなり醜い）鳥がたった一羽、それだけだ。

この哲学的・論理的な問題をもう一步進めて、私たちが経験する現実には当てはめよう。私が子どものころから取り憑かれてきた問題だ。この本で黒い白鳥（ブラック・スワン）と言ったら、それはほとんどの場合、次の三つの特徴を備えた事象を指す。

第一に、異常であること。つまり、過去に照らせば、そんなことが起こるかもしれないとはっきり示すものは何もなく、普通に考えられる範囲の外側にあること。第二に、とても大きな衝撃があること。そして第三に、異常であるにもかかわらず、私たち人間は、生まれつきの性質で、それが起こってから適切な説明をでっち上げて筋道をつけたり、予測が可能だったことにしてしまったりすること。

ちょっと立ち止まって、この三つの特徴をまとめてみよう。普通は起こらないこと、とても大きな衝撃があること、そして（事前ではなく）事後には予測が可能であることだ。一握りの黒い白鳥で、人間の世界がほとんど説明できてしまう。アイデアや宗教の成功から歴史的な事件の経緯、私たちの私生活のいろいろな要素まで、なんでも説明できる。一万年ほど前に更新世が終わって以来、こうした黒い白鳥の影響はどんどん大きくなっていく。産業革命の間に加速が始まり、世界がより複雑になる一方、私たちが新聞を読んで調べたり、論じたり、予測したりする普通の出来事は、ますますどうでもよくなってきている。

一九一四年に事件が起こる直前、私たちがどれだけ世界のことを知らなかったか考えてみればいい。それで、その次に何が起こるか、どれだけ予測できたか想像してみるのだ。（高校のくだらない先生が、あなたの頭蓋骨の内側にねじ込んだ説明を使うなんてズルをしてはいけない。）ヒトラーの台頭、それに続く戦争なんて予測できただろうか？ ソヴィエト圏の急激な崩壊はどうだろうか？ イスラム原理主義の台頭はどうなんだ？ インターネットの浸透は予想できただろうか？ 一九八七年の市場の暴落（と、それよりもさらに予想外だった回復）はどうだ？ 一発屋、流行、ファッション、アイデア、芸術分野や流派の勃興、そうしたものが全部、黒い白鳥の挙動に従う。私たちのまわりにあるものごとなら、文字どおりほとんどなんにでも黒い白鳥が当てはまる。

予測が難しく、大きな衝撃を与えるというだけでも黒い白鳥は十分に不思議な生き物だが、この本が主に扱うのはそういう点ではない。そういう現象に加えて、私たちは黒い白鳥なんていないフリまでする！ あなたやあなたの従兄弟のジョーイやわたしだけがそうなのではなくて、「社会学者」はほとんどそうだ。彼らは一世紀以上もの間、自分たちのやり方で不確実性がちゃんと測れるなんて思い込んで仕事をしている。でも、その手の不確実性の科学を現実の世界に応用しようとする、とんでもないことになる。

(ナシーム・ニコラス・タレブ著 (望月衛訳)『ブラック・スワン [上] -不確実性とリスクの本質』(2009年、ダイヤモンド社))

【設問】

問1 課題文における下線部のように「いないフリ」をするのはなぜだろうか。その理由を説明しなさい。

問2 「黒い白鳥 (ブラック・スワン)」とは何か、を具体的事例を用いて説明しなさい。解答は次の(1)(2)に従い、解答用紙の指定場所(1)(2)から書き始めること。

- (1) 「地球温暖化」が、「黒い白鳥 (ブラック・スワン)」に該当するか否か、を検討しなさい。
- (2) 「黒い白鳥 (ブラック・スワン)」であると説明するためにふさわしいとあなたが考える例(ただし、上記課題文および上記(1)にあるものを除く。)を1つ示し、それが、「黒い白鳥 (ブラック・スワン)」である理由を説明しなさい。

(100点)